

8 部落問題文芸作品選集

部落問題文芸作品選集

第8卷

岩野泡鳴

毒藥を飲む女、部落の娘
斧の福松

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第八卷

昭和四十八年十一月十六日発行

発行者 松 本 富 夫

発行所 株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二―一二―一五
(七一六) 六一五一 (代表)
電話(〇三) (七二三) 九二四四 (夜間)
振替 東京 七八四九八番 千一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

目次

一、毒藥を飲む女	1
二、部落の娘	119
三、劇斧の福松	184



毒藥を飲む女

岩 野 泡 鳴

一

よそほつてまて見せるいつものむツつりとは少し違つた氣分で、貞夫は自分の物だが、最も好かない家へ出かけて行つた。然し下宿屋吉野の玄關をあがると、直ぐ女房の壽美子に出くわしたので、いつもの通りまたむツつりした氣が起つて、物を云ひかけたくも無かつたが、強いて顔を和らげた時は、棒立ちに立ちどまつてゐた。

壽美子も立ちどまつて、冷やかな笑みを示めた目をちツと所天そとうに投げた。そしていきなり、

『珍らしくにこ／＼してらッしやいますが、何か面白いとでもありますか、ね?』

『……………』これで、もう、渠は素直に出られなくなつてしまつた。腹のどん底に用意してゐた聲を腹一杯に出して、『金が入るんだ——三圓だ!』

『へい——』かの女はきよんととして、所天の突然な太い大きな聲を出した顔を見

守つてゐたが、飛び出たやうな眼をわざとらしく横に反らして、「お金なんかありません!」

「何!、こないだ渡したのが、もう、無くなつたわけは無い!」

「あれは」と、また向き合つて、「うちの暮しに入ります——お客さんが立て換へて呉れいと云つても、直ぐ困るぢやありませんか?」

「下宿人に金を立て換へると決つてやアしない!」

「あなたは御自分のうちの商賣を御存じないのですよ。」

「商賣はお前が勝手にしてゐるのだ、あれは別にあなたの仕事がある!」

「ぢやア、あんなめかけなどに夢中にならないで、セッセとその仕事をすればいいでしょう——下宿屋は、ね、亡くなられたお父さんが、やめてしまうのも惜しいから、わたしにしろとおつしやつたのですよ!」

「だから、勝手にするがいい、さ。あれは兎に角、今、音楽會に行く金が入るんだ。」

「ふん」と、かの女は鼻で受けて、横を向き、「きのよの新聞に在つた音楽俱樂部でしょう——ありません!」

「よし!」かう云つて、渠は烏うち帽をかぶつた儘、つか／＼と、家族の居間へ這入つて行つた。

「あなたは」と、かの女はついて来て、「泥棒して行く氣です、ね。ぢやア、お待ちなさい、わたしが出しますから。」

「おれのうちの物を」と、ツツ立つて勢ひを見せ、

「あれが出すのに、何て泥棒だ?」

「だつて」と、一生懸命な口答へをするやうに口をとんがらかして、「算笥をこわされるだけでも詰りませんから、ね、この家だつて、もう、抵當に這入つてゐますよ。」

「知れたことだ、今度の樺太の事業の爲めにやア、家どころか、家族やおれ自身をも犠牲にするかも知れないんだ。」

「あの女におだてられてでしょう——」

「手前におれの心が分るものか？」

「分つてますとも！」

「ぐづぐづ云はなくて、出せ！」

「樺太の事業だつて、成功するか、しないか、分るものぢやアない——きのふだつて、二百圓よこせの電報が來たのを届けたのに、どうするんだらう？」

「どうするも、かうするも、おれの考へだ。」

「あなたはおれ——とお云ひなさいますが、ね、若し失敗したら、うちのものをみんなどうする氣ですかつえさせても構はないのでしょう」などと云ひながら、壽美子は引き出しをあけて、札を三枚出した。「ほんとに馬鹿々々しい！」

「出せ」と、引つたくつて、「うちなんざアどうでもいいんだ！」

「そんなにあの女が——」

「いつも云ふ通り、ね」と、あごを突き出して、「おれは女の爲めに狂つてるんぢやアない！」

「狂つてるぢやアありませんか？ちツともうちにゐつかないで——」

「おりやア手前をいやなんだ！」

「いやでもなんでも、家内は家内ぢやアありませんか？」

『だから、早く自決しろと云ふんだ！』

三人の子供はあづ／＼しながら、一緒に室をのぞいてゐるので、女房のくど／＼云ふのを相手にしないで、貞夫は飛び出すやうに家を出てしまつた。

その頃、貞夫は、芝公園に接する或片側道の粗末な二軒長屋の一方の二階へ、お島を移してゐた。

一度も二度も居場所を隠して歩いたが、魔のさすやうに發見せられるので、とう／＼大膽になつてしまつた。それに、樺太から事業上の電報などがいつやつて来るかも知れず、また、新聞雑誌の寄稿依頼者があつた場合——これが本來の職業であるから——ゐどころが分らないのも困ると思つて、自分の家に近いここに決めたのである。

お島は最初これを非常に反對した。

『また、やつて来て人に恥ぢをかかすのぢや。』

『もう、決してをどり込まないと誓はせてあるのだから。』

『分るもんか、あの氣違ひが！』

『來たら、蹴倒すだけのこと、さ。』

時々、叩におかづやら、一人前のおはちに五もく飯やらを、子供が好意らしく屈けて來ることがあるが、お島は口に入れたことがない。

『毒が這入つてゐるかも知れへん。』

『まさか——』

「まさかと云ふたつて」と、かの女は口びるを左右に引き張り、齒の間に少しつばををどらせ、

『それだけまだ向ふを信じてるんぢや。』

『信ずるも、信じないもないぢやアないか』と、微笑しながら、『死ねばもろともだア。』

『あたゐ、まだ』と、眞面目くさつて、皮がたるんでくしゃくしゃした顔の中から男を見詰めて、『あんな婆々アに殺されたうはない。』

『おれも死にたかアない。』かうからかひ半分にあしらひながら、貞夫は、家から届けて來たものがあつと、いつもみんな自分獨りて平らげた。かの女には、それがおのれを馬鹿にしてゐるとしきや思はれないうやうであつた。

かの女は一日物を云はないとがある。貞夫はまたそれをいいしほにして、急ぎの原稿を書きつづけた。障子をあけると、向ふは、もう、公園の一部で、烏が澤山集まるので烏山と名の付いた森が見える。この森と家の建つてゐる側との間の道幅は廣いが、少し傾斜があつて、上では直角に曲つて、水道溜め場のある方に導く。その角を曲つて來る人の姿が見えると、『旦那さまや奥さまや、お助けてございます』をやり出す様子の乞食が、こもを敷いて毎日のやうに、丁度、この二階の正面に出てゐる。

『また云ふて』と云つて、お島はよく障子のあはひからのぞいた。親子はいかにも哀れみを乞ふやうな様子で往來の男女を拜んでゐるが、人通りがちよつとでも絶えたと、子は

『何かたべたい、なア』と云つて、足を投げ出し、横になつて天をながめたりする。

『それ、それ』と親に注意されると、急に拜みの卑劣な姿勢に返つて、向ふから見え出したものを見ない振りて見ながら、再び物乞ひの聲を張りあげる。

『あの子面白い子だ——あたしも何かたべたい、なァ——』

『ぢやア、またあすこのあんなかい?』

かう云はれてかの女が機嫌を直すこともあつた。貞夫はそれにお付き合ひしながらも、執筆を絶つたことはない。その乞食親子とこの書齋代用の二階とを舞臺にして、自分の事ではないが、自分が先驅者の一人であつたと思ふ詩界に於て、落伍者となつた架空の一詩人を點出し、その無自覺な努力をしてゐるところを以つて、或る方面に對する諷刺をした小説が出来たのも、この叫びである。去年苦心して書いた長編『耽溺』が今年の二月に或雜誌で發表せられてから、渠は小説をも書かうと云ふ確信が強くなつてゐたのだ。でも、いろんな雜誌や新聞から依頼して來るのは、多くは評論の方で、それに次いではまだ、渠としては、もう、興が去つてしまつた詩である。かう云ふ依頼を渠はすべてこの二階で受けた。『お助けてございます』が初まると、お島はきつと障子のそばへ行つた。そして御成門の電車停留所の方から傾斜をのぼつて來る男があると、どの男を見ても、先づ貞夫の客ではないかと思つた。

『遠てた』と、失望した様子で、『うちへ來るんかおもたら。』

『東京にやア、人は多くゐるから、ね。』

『でも、さのふ、あの加能に似た人が通つた。』

『お前、あいつを好きだ、ね——?』

『誰れがそんなことを云ふた!』かの女は足ふみして怒つた。机に向つてゐる男を見おろして、

『あんな輕薄な奴、あたゐ嫌ひぢや!』

『あれも嫌ひだが、ね、小學校時代の友人でもあるし、いろんな口聽きとして役に立つやうだから——』

「そりや、自分の勝手やないか——あたゐ知らん！」

そしてまた上から下りて来る女があると、かの女は先づ貞夫の女房ではないかと——あれは綿服主義だとか云つていつもきたないなりをしてゐるが、立派さうな風の、若いのを見ると、また、女優ではないかと思つた。

この上を抜けたところに、帝國女優学校の假教場があつて、そこへ島も這入らうとして貞夫にかけ合つて貰つてゐるし、またその用意に三味線と踊りとを稽古してゐるのであつた。

貞夫と島との間に出来た最初の約束はそんなことではなかつた。

かの女が一たびその故郷なる紀州に歸るまで在學して卒業した或裁縫學校へ再び入學し、一二年間その高等科を修めさせることであつたが、裁縫などよりも琴の師匠にてもなる道を開いてやらうとしてゐるうちに、貞夫自身の直つてしまつた或病氣を急激に受け繼いだが爲め、殆ど半年ばかりは病院通ひで經過してしまつた。

「もう、さう苦にならんさかい、早う何かの稽古にやつてお呉れ」と、かの女が云ひ出した頃には、かの女に對する渠の一度冷めかけた愛情が再び回復してゐた。そして渠は、多少の慾目が手傳つてゐるとは身づから思ひながらも、既に二人まで失敗した女優養成を今一度かの女にやつて見ようと考へ付いた。それに、やがては自分も事業上一時は樺太へ出向かなければならないので、かの女をどこかへ——金銭上の責任は持つとしても——託して置くやうにする必要もあつた。

「どうだ、女優になつて見ちやア？」

『そんなもの、いやぢや!』

『何も顔を赤くしないでッていいぢやアないか?——三枚目ぐらゐのところぢやア、牛耳ぎうじが取れるかも知れないぜ。』

『三枚目たら——?』

『……………』貞夫はその日それに對する返事をしなかつたが、かの女おんながさう云ふことに對して有する恐れだけは、毎日のやうに努めて取り去つてしまふやうにした。そして、顔のことは云はないで、歳がもう三四年若かつたら三枚目にも、第一流の花形にも行けたにきまつてるが、それにしても、背せが高いのは女おんな倭として一つのいゝ武器だとも話した。

六疊敷ろくじょうの、外に向つたところに小い一閑張りを置いて、その上で貞夫が筆を走らせてゐるそばへ來て、かの女おんなは片やまひぢを突いて横になり、黄の勝かつた中形なかつ矢や絆がりの廣島銘仙の綿入れの、太く特色の襦ゆたきの出たと、ゐを、足袋の親指でさわりながら、云ひにくさうに、

『あたいても成れるだろか』と聞いたこともあつた。

『お前の決心一つ、さ。』

『決心したッて、成れないこともある。』

かの女おんなは、それでも、頻りに獨りて鏡に向ひ、自分の顔をいろんな風に映して見る日がつづいた。

『大分乗り氣になつて來た、な』とは考へながら、貞夫は後ろ向きにそ知らぬ風をして、友人なる有名な背景畫家の山野がいつか云つたことを思ひ出した。

『あいつア馬鹿だぜ——少し足りないぜ。』

『そりやア、君のやうに藝者や苦勞人ばかり見て來た目にやア、ね——ありやア、まだほんの、田舎ものだ。土のほひが抜けてないのだ。』

この問答があつたのは、山野が貞夫とお島とを招待した或うなぎ屋の二階で、お島が使用に立つた留守の時だ。かの女が澄ましてとの座に返つたところで、山野は酔眼でかの女の顔を小娘か何かのやうにのぞき込みながら、

『可愛い、ねえ。』

『ふん』と、かの女は自分の顔をしやくつて、眼を横に反らせた。これはかの女が誰れに對しても冷かされる時などにする表情だが、自分は餘ほど得意であるのだ、な、と貞夫にはいつも推察が出來た。けれども、こんな時ほど女の顔の缺點をさっけ出す時はないと渠には見えてゐるので——兎角、太い横じわが三筋寄り勝ちの額の下に、青みがかつた眼の玉が動き、あまり高くない鼻が廣かつて、その下で大きな口が一字に引ける。意地の悪い表情の變化が豊富に出來ると思はれるのは、ただこの口がある爲めだけだ。

『それにしても、もつと都賀馴れなけりやア、ねえ——』

『田舎ものなら、田舎ものに成れる——では、女優にしておくれ』と、かの女が云つたのは、それから二三日もあとのことだ。

女優學校へ傍聴生とでも云つたやうな入學の交渉は、校長が旅興行にまはつてゐるので、返事はそれで歸るまで得られないのであつた。

その校長がわが國では有名な女優であつて、年中どんな忙しい生活をしてゐるのかも知らないお島は、

不在で分らないと云ふ返事を聞いただけで、それが體のいい斷りではないかとあやうんだ。

『そんなに心配するなよ、どうせ何事も手筈が延び／＼して來たのぢやアないか?』

『だから、早う何かさせて呉れたらえいぢやないか?』しつと、また、瞰むやうにして、『樺太のことと云ふたら、——何でも自分のことは——火の付くやうに騒いでゐる癖に、あたの事となつたら、いつでも平氣でぐ／＼させて置く!』

『ぢやア、下のお婆アさんに先づ三味線でも習つてゐるがう、いゝ!』

『そんなら、早う頼んでくれたらえいぢやないか?』

『さう意地悪く云ふなよ。』貞夫は、かの女が餘ほど情の籠つた時の外はあだやかに出ず、どことなく皮肉なやうな、いぢけたやうな物の云ひ振りをするのを、社會一般から見ても不自然な狀態に置かれてゐるのを忘れない爲めだと受け取つてゐる。渠は、どうせ、今の妻は離別する時があると思つてゐるので、お島に對しても、時には『やがてあれは女房が無くなるのだが』とも語つた。さうかと云つて、いづれ來たるべき本妻離別の時になつて、お島のやうな女を正式の妻に直さうとは夢にも考へてゐない。

『本妻にして呉れ、して呉れ』が、子供が母に何かをねだるのを見てゐるのと同じやうに、渠にはうるさかつた。

それには、毎日の女のあたまで何か一つのきまつたことに占領させて置く必要から、さきには、貞夫が何年か以前に使つたヴィオリンを持つて來た。すると、かの女は獨りてどうやらかうやら調子に辿り付いて、田舎で歌を聞きおぼえたストライキ節などを云はせるやうになつた。で、三味線も行けないことはなからうと云ふことが分つてゐた。

貞夫は自分の家から、繼母が残して逃げて行つた古い三味線を、壽美子の反對を受けたにも拘らず、ひつたくつて來たのである。それが毎日一度は、渠の坐わつてゐる下から、ぺこん、ぺこんと聞えた。同時に、またかの女は近所のちよつとした踊りの師匠へ通つたので、二階の片隅では、しよつちう、五十錢であつらへて貰つたとか云ふ花やかなあふぎが廣げられたり、閉ぢられたりした。

『清田さん、お稽古をしましょう。』かう本當のお師匠さんらしく呼びかけられて、お島が三味線を以つて下りて行つた時、貞夫は客の加能泰藏に對して二百金の周旋を頼んでゐた。

渠はこの客に大して信用を置かなくなつた。と云ふのは、不斷から輕薄な性質であるばかりか、その本職のやうにやつてゐる周旋が一向依頼通りに運んだとがない。家を抵當にするからと云つて、去年から頼んであつた事業費引き出しの件も、とう／＼意外の方面から突然に出來た。去年の歳末に迫つて子供が三人揃つて入院し、一人は死んだ騒ぎの時も、加能はとう／＼工面し切れなかつたので、貞夫は自分の足かけ七年間勤めた商業學校の英語教師を、どうせ辭職するのであつた豫定よりも、三ヶ月早く辭職し、その退職金を十二月三十一日と云ふ日に受け取つたので、僅かに年を越えることが出來た。

けれども、今回は、もう、二進も三進も行かなくなつたので、またこの加能を呼び寄せたのである。柄でもないと言はれる事業に於ける兵站部を勤める爲めに、技師や弟以下に後れてまだ居残つてゐる貞夫ではあるが、かう早く金の追求が來るとは豫期しなかつた。もつとも、その用意としては、地方の或都會の水道建設費二百萬圓を外資に仰がせることにして、渠の先輩で今コンミッションマチャントをしてゐる人に話し込み、市の責任者の依頼状を待つことにまで運ばせたが、これは勸業銀行が出すから外資と

仰ぐなと云ふことになつて、渠の奔走は無駄になつてしまつた。

また、渠の玉突き仲間なる或鐘詰問屋の主人へかけ込んでも見たが、少くとも第一回の製品を見ないうちは、商買の法則として、金の融通が出来ないと云はれた。

家を二重抵當にするか、餘ほど好意ある人から信用貸しを仰ぐか、この二つの道しきやなかつたのをこの客は今度は、どこをどう甘く立ちまはつたのか、信用で借りられさうだと云ふ話を持つて來た。

「ぢやア、頼む。」

「然し金のことだから、君も十分に責任を負ふて呉れんと——」

「そりやア、無論、約束する期限までにやア——」

「おい」と、今まで何となく下へ氣を取られてゐた加能が、俄かに「下手くそぢや、なア。」

「ふ、ふん。」貞夫も客について又苦笑ひをした。

お島は『今昔』を習つてゐるが、三味線がびつこのやうに歩いてゐらしい。

「まだ聲を出せないのか？」

「出せば出せるだらうが、下の婆アさんを半分馬鹿にしてゐるから、いけないの、さ。」

「無論、あの婆アさんかて」と、時々、加能に關西辯が出るのはお島と同じやうで、「上手だと云へん。それに、五十づらをさげて、薄化粧をして、若い亭主に焼き餅を焼く奴だから、なア。」

「清田に聞いたのだらう——けれども、ね、如何に縁日商人だからツて」と、貞夫は額の廣い、頬のこけた顔に、鋭い眼を眼鏡の裏から光らせながら、「さう馬鹿にするものぢやアない、さ——お互ひに好き合つてゐるのだから。」

「よく夫婦喧嘩をすると云ふぢやないか？」

「そりやア、また、出来心からだらう、さ。」

「君等と反對だぜ、女が五十で、男が三十四では。」

「僕はさう年を取つてやしないぢやアないか？」

「いやさ、年の割合ひがよ——あいつは二十二ぢやさうぢやないか？」

「欲しけりやアやるよ、僕が樺太へ行つちまやア。」實際、貞夫はその金を空鑛材料に換へ、それを持つてあつちへ行かなければならないのだ。そしてその後のお島は、都合によれば、どうなつてもいいと思はないこともない、かう金の融通に困つてゐる時は、殊に。

「君の病氣の身がはりなんて」と、加能は反抗の様子を見せようとしたが、顔に多少の釣り込まれた色が見えたのを、貞夫は私かに、「馬鹿な野郎だ」と認めた。

「聲をお出しないよ、聲を！」下の婆アさんの年に似合はない涼しい聲がした。「出さないぢやア、いつまでも出ませんよ。」

「ナダイムスモノ」低く、然し氣取つてゐるやうな——

「やつてゐる、やつてゐる！」加能は背廣の洋服に圓まつて、そ、場にわざとらしくひつ繰り返つた。

貞夫が音楽倶楽部の入場費を自家から強奪したのはその目で、——渠が不愉快な心持ちで戻つて來た時、お島が同倶楽部へ伴はれて行く用意を済まして、貞夫の机に横すざりにもたれ、むろ咲さのにほひ菓を頻りに鼻に當ててゐた。渠の友人なるアメリカ歸りの或客がかの女へ贈り物に持つて來た小鉢で、「あの人はなか／＼ハイカラだ」と云つて、かの女はその客が歸つたあとまでも喜んだ物だ。そして貞